

日本名婦伝

太閤夫人

吉川英治

青空文庫

寧子ねねは十六になった。

妹おの於おややと二人して、伯父伯母にあたる浅野家に養われて来た。ふたり共、養女なのである。

世間は知らなかった。それほど、浅野又右衛門夫婦の愛は、世の親たちと変りなかった。十六というと、寧子ねねも人知れず、「女の先」を考え始めた。時代は早婚の風である。もう他から結婚のはなしがいろいろ持込まれるのであった。

その数々の縁談はなしのくちで、親たちの眼まなこに選り残えされているのは、もちろん皆、尾張清洲きよすの織田家中ではあるが、とりわけ、

藩さむらいがしらだいの侍頭がくのぶもり 大学だいがく 信盛のぶみ の舎弟しやてい、佐久間左京さくまざきやう

信長の小姓組こしやうぐみ、前田犬千代いぬちよ

槍組衆やぶらぎぐみの河尻与兵衛かわじりよへい

足輕三十人持あしきよさんじゆんぢ、御小人組小頭おこびとぐみこがしら 木下藤吉郎きよきちろう

——などの四名が候補になっていた。各に特長もあり理由もあって、
「急ぐこともないから、よう生涯を考えて——」と、寧子ねねにも告げて、宿題の予日をのこし、親たちも先方へ、まだはつきり返辞をしない程度になっていた。

二

四人の候補のうちで、最も身分の高いのは、佐久間左京であった。兄大学信のぶもり盛は、愛知郡山崎いちごおりで、出城でしろとはいえ、一カ城の城持ちであり、左京も織田家では、重要な地位を占め、主君のおおぼえもよかった。年齢は二十三歳とかいう。

「申し分はないが、何せい、こちらは弓之衆ゆみのしゆうの長屋住い、身分がちがすぎる」と、又右衛門夫婦は、その点で迷っていた。

総じて、尾張半国の小藩にすぎない織田家は、君臣ともに、質素で財力も乏とほしかったが、わけて浅野又右衛門は、小しょう禄ろくな弓組の一家士でしかなかった。

年ごろの娘ふたりに、人なみの教養もさせ、人知れぬ「躰むことり」の支度をしておくだに、なかなか容易ではない家計だった。

その点では、

家庭へもよく遊びに来て、気心もおけないし、先の人ながらも素姓すじょうも知れている前田犬千代は、

「寧子ねねも、嫌ではないらしい」

と考えられて、親たち自身の心もだいたい傾かたむいていた。

難をいえば、犬千代は感情につよく、同僚なども刃傷沙汰にんじょうさたを起して、殿の勘気をうけたりしたこともあった。素行そこうも放縦ほうじゆうのように思われる。また、美丈夫なので、寧子とのあいだに、恋愛でもあるかのようなうわさも撒まかれた。年は二十四歳、寧子も望んでいられるらしいし、ふさわしい聳むしとは思われるもの、まだ又右衛門夫婦の決心は、はつきりせずにいる。

では、河尻与兵衛かわじりよへえはというに。

これなら剛健で、武勇は槍組の随一と聞えているし、戦国の士として、負け目は取らないが、ただ寧子とはあまり年がちがう。それに一度妻をもった人でもあるし、

「かわいいそうではありませんか」

と、又右衛門よりは、妻のほうが、気のすすまな顔いろだった。

殆ど、問題にしていけないのは、つい近頃、小者からやつと士分になったばかりの男で、まめに足を運んで来る木下藤吉郎という男だった。

「かなわぬよ、あの男につかまると」

又右衛門も、閉へいこ口こうしている。こちらでは問題としなくても、先は熱心を冷さまさないのである。物を届けて来る。些ささい細な用でもすぐ来る。無くてもやって来る。来れば話しこむ。——その末には、

「どうでしょう。決して、寧子どのを、不幸にはいたしません。——それだけは誓えませぬ」

などと縁談はなしは、聳さかどの直接なのである。

その懸命けんめいさに、つい膠にかのないこともいえず、

「まあ、考えて」——とか。

「寧子の胸もきいた上で——」

とか、云つて来たのが悪くもあつた。近頃では、又右衛門も持て余していた。といつて、応じる気には毛頭なれないのだ。どうながめても、

「この男の将来では、まあ百貫ひゃくくわんの禄ろくでも取られたら関せきのやま。生涯、妻に不幸な目は見せ

ぬ、などと云いおるが疑わしい」

と、考えられるからだつた。

又右衛門の評価は、まだまだよいほうなのである。世間では、彼が低い小者勤めをしていた頃の呼び慣わしのまま、いまだに、

——猿。猿。

と呼んで、藤吉郎とは云わぬ者のほうが多い。

家すじも、中村の百姓だとしか聞かないし、現在も、土分のうちでは一番下の軽輩だし、顔は、猿に似ているし、風采といったら寔にまことあがらない小柄なほうだ。取柄とりえといったらただ、

「おもしろいお人や」

と、台所の下婢かひどもや、下僕しもべなどから、自分たちの仲間のように思われて、人気のあることだけだつた。

だから、寧子ねねや、妹の於おややまでが、彼の姿を門に見れば、

「——お父さま、また木下様が、お越しですよ」

と、理わけもなく、おかしがるのが先で、眼のうちにも入れていなかった。

三

永^{えいろく}禄四年の六月、桶狭間^{おけはざま}の合戦の翌る年。

津島祭^{つしま}りのある頃だった。

やぶ蚊の多い弓之衆^{ゆみのしゅう}の組長屋で、一組の聶^{しゅうげん}とり祝言^{しゅうげん}があつた。

聶^ねどのは、当年二十六歳の木下藤吉郎で、むしろ聶子^{ねね}のほうから望んで遠^{にわか}に挙げられた
婚儀と聞いて、

「へええ？ 猿が、あの聶子^{ねね}どのと？」

と、世間には、幾^{あき}つも呆れ顔が出来た。

世間の驚いたのも無理もない。親の又右衛門夫婦ですら、その晩、婚儀の席に並んだ者
のはなしを聞けば、

「何やら、力落しの態で、浮きもせず、世間に肩身のせまいような顔してござつた」とい
う。

なお。——当夜の模様はと、問いただせば、

「板屋びさしの弓長屋に、ひっそり縁者どもが寄り、簀搔藁すがわらを床とこに置いて、うす暗い短た檠んけいの明りが三ツ四ツ、賀どのと花嫁が中ほどに坐つて、形ばかりの杯さかずき事ことをしたままでのこと——」

と、如実に語つて、

「——花嫁の気は知れぬが、たださしうつつ向き、賀の猿どのは、けろりとしたものよ」ということだった。

聞く者は、もう一度、啞然とした。

四

足軽三十人持の小頭こがしらといつては、まだその足軽よりすこし足たしなくらいの生活でしかない。清洲きよすの侍さむらい小路こうじの裏に、若い夫婦は、初めて小やかな家と鍋釜なべを持った。

織田家はその頃、隣国の美濃みのの斎藤方へ、しきりと攻略を計つていた。良人はたえず家にいかなかった。時には、木曾川の国境へ遠征し、稀 《たまたま》、帰つて来ても城内の寝泊りが多いし、まだ二十歳にもならない新妻は、常に、陰膳かげぜんばかり供えて、独りで喰

べ、独りで縫い、独りで家事を見ていた。

けれど、その良人が、稀に家にあつて、

「寧子。寧子」

と、朝から晩まで、快活な声で、寛いでいると、彼女は、百日の苦も、一年の留守も、

物のかずではない。しんから今の生活が楽しまれた。

「侍の妻とは、不びんなものだ。——だが、こうして殿からお暇をゆるされて、家にある

一日だけは、気儘もいうがよい。おれの体は、そなたのものだ。そなたの体はまた、おれ

のものだし……。はははは」

どこまで、明るい人である。寧子は、持った良人を、いつも改めてそう見直した。そして、自分の求めた結婚に、悔いるような気持は一瞬でも起らなかった。

ある時、ふと、

「寧子。そなたは、わしを知った最初は、わしが嫌いだったろう」

そんなことを、良人は訊ね出した。

正直に、寧子は、ほほ笑んで頷いた。

「ええ」

「それが、どうして遽にわかに、わしと生涯を暮す気になったのか」

「それはこうです。いつかあなた様が、中村のお母様のところへ上げのお手紙を、何かの品と一緒に、お忘れになつて行つたでしょう。実は、妹がわたくしにそれを見せたので、あの中ふみの御孝心なお文ふみに心をうごかされたのです。……そればかりではありませんが、それから他よそながら、あなたのお勤めぶりや、おはなしの端々はしはしにも、心をひかれるようになったのでございました」

云い終つて、寧子は、顔を紅くした。

すると、良人は、

「そうか。やはりそうか。実申せば、あの文ふみは、そなたの心をうごかすため、わざと置き忘れて行つたのだ。はははは、そなたはわしの兵法で、まんまと擒人とりこになつたんだよ」
手を打たないばかり、欣うれしがつて笑うのだった。

けれど寧子は、すこしも興きざめな心地はしなかつた。なぜなら良人の孝心は、決して嘘でないからである。中村の田舎にいる母親に対する藤吉郎の孝心は、離れてこそいるが、恋妻の自分にしてくれる以上であつた。戦場からよこす便りにも、母の事を書いてないこととはないほどだし、家に戻つても、ここにはいない母親のうわさをしない日はなかつた。

「神信心かみしんじん、仏信心ほとけもだが、わしの胸には、どこにいても、母がいるからな。母を思い出すと、悪い事はすまいと思う。善い事はしようと思う。そして良い子をもって倅しあわせだと、母に欣んでもらいたいと思う」

常々、藤吉郎は、そう云った。

また——

「わしの願いは、中村じゆうで一番の不倅ふしあわせ者じゃった母を、日本一の幸福者にさせてお上げ申したいことだ……」

と、云いかけて、後は、寧子の顔を見て笑った。そして、何を云うかと思えば、

「そして共々、この女房をもな——」

と、彼女の美しい鼻を、指でついた。

五

猿。猿。——猿の妻。

添うてからも、幾年かは、辛いつら声を、時折聞いた。世間の軽蔑けいべつは去らなかつた。

自分が云われるよりも、良人の云われた場合に、寧子は腹が立った。けれど良人は意にかけるふうもない。笑うのみである。

いつか彼女も、良人に訓練されて、笑っていられるようになった。

がしかし、それも、良人が洲股すのまたの築城をなし遂げて、一躍、五百貫の恩地と、一城の守将という地位とを克かち獲とると、世間は今さらのように、

「怖おそるべき男」

と、藤吉郎を見直して来た。

寧子はひそかに、自分に誇った。よくぞ生涯の人を選んで過あやまらなかつたと、未婚の頃の岐路を顧みて思うことが多かつた。

ただ。

良人の立身と共に、彼女にはべつな困難が加わつて来た。それは、良人の累るい進しんに、自分の教養が——劣らない妻としてゆくことが、ともすれば、追いつけなくなりそうな点であつた。

家臣は多くなる。一族はまわりに持つ。経済は膨ぼうだい大だいになってゆく。君侯への心くばりから、使者の往来といったような社交。良人の身まわりもまるで違つてきた。

その繁忙の間にも、夜々の暇をぬすんでは、修養を加えてゆかなければ、以前の一藤吉郎ではない——羽柴筑前守秀吉の妻として、いやでも取残されてしまいそうだった。良人の事業と榮進とは、そのために、どんなに愛している妻でも、妻のために、待っている理はないからである。

結婚してから、いつか、十一年は経っていた。

主君の信長が、尾張半国から興つて、今川を討ち、美濃を経略し、居城も清洲から小牧山へ、それからまた岐阜城へと移つて、尾濃百二十万石を治めるようになって、秀吉もそれまでの功によつて、近江長浜の城主二十万石という大身になっていた。

「寧子、そなたは、女子にめずらしい者じゃ、偉いものと、秀吉も今にして思う」

「お戯れ遊ばしませ」

「いや、真だ。足輕に毛のはえたくらいな身分であつたあの頃のわしを——良人に選んだ眼は、処女頃の女子として、偉いといわねばなるまいな。——そのむかし、わしがまだ十八歳の頃、針売りなどして諸国をさまよい歩いてきた艱苦の頃だ。庄内川の河原で、信長公の御馬前へ駈け伏したところ、そのまま召しつれて、草履取りにお使いくだされた御主君のお眼もだが——そなたは、御主君に次いで、この秀吉の人間を、見とおした偉い女子

じゃ、賞^ほめてつかわす」

「そうお賞めいただきと、寧子は汗がながれます」

「なぜか」

「こんなにまで、あなたが御立身なさろうとは、寧子も思っておりませんでしたから」

「あははは、それはそうかも知れぬ。この秀吉も、思っておらなかったからな」

「では、あなたは、御自身どれくらいまで、御出世遊ばそうと、考えておいでになりましたか」

「いや、わしはな、そう上を望んだことはない。草履^{ぞうり}取りをしておる時には、御主君のお草履をつかむ仕事を精いっばいに勤め、士分になれば士分の仕事を精いっばいに、一城の主となれば、一城の主を精いっばいやりおるだけじゃ。——だから今も今を精いっばいにやっておるに止る」

秀吉夫婦のこういつたふうな話は、侍臣の前でも、奥女中たちの居並んでいる所でも、声^{こゑ}を密めるなどということはなく、至極、明けつ放しに交わされるのであった。

以前の貧乏ばなしなど、わけて少しも、隠^{かく}して銜^{てら}うふうはなかった。

秀吉が宿望であった、故郷の母も、長浜の城に迎えた。

姉も弟たちも、寧子の一族たちも、皆、彼を繞めぐつて、門戸の榮えに恵まれた。

「わしに仕える心を、母につくしてくれ。母が歡べば、わしは自分につくされたより欣しい。ありがたい」

秀吉が、寧子へいう、口癖であった。

母はもう五十であった。まったく田舎の一老嫗おうなである。果報にすぎると、常に勿体ながるばかりであった。その母は、誰よりも、寧子が氣に入っていた。

夜の伽とぎに、母を中心に取巻いて、

「お母様、お聞きください。わが良人つまが、わたくしを娶めとる時には、お母様へのお手紙を、わざと忘れ落したふりして、わたくしの心をうごかしたのでございますよ。いわば親孝行おとしりを囮おとめごころに遊ばして、処女心をだましたのでございます」

などと思ひ出ばなしを、戯れに告げると、

「まあ、悪い子じやなあ」

と、母はおかしがつて、また、中村時代の手に負えなかつた秀吉の——日吉ひよしといった時分の悪戯いたずらぶりだの、奉公先からおしりばかり持込まれたことだの、喰べるに物もなかつた貧苦の中に泣かされたことだの、寧子にはなして聞かせるのだった。

「どうして、まだまだこの子には、小さい折の面影がたんとある。そなたも、上手に騙たぶらかされぬがよい」

母が、寧子に味方して云うと、秀吉は大いに懼おそれをなして、

「いけませんなあ。折角、秀吉がよい女房に仕立てておるのに、母上がそうお壊こわしなされては」

と、慌あわてて、次のことばを、抑えるまねした。

近きんじゆう習しゅうたちも笑えば、侍こしもと女たちも、笑いこけるほどであった。そして周囲は、主人の物質的な栄華よりも、その睦むつまじさに、心から羨うらやましさを覚えるのだった。

六

誰へも、洩あらしたことはない。どんなことでも隠さない母へも——である。寧ね子ねは、ひとりで、悩むことがあった。

それは秀吉の浮気であった。自分のほかに、愛する女性のできたことである。

「貧しい細長屋で暮くしていた時のほうが……」

と、今の栄位を、むしろ厭いとう気さえこの頃は起つた。徒いたづらに、清洲時代の小やかな二人暮しの時ばかり振返られて、良人の内助に、ふと、心のゆるむ日もあつた。

その良人に代つて、岐阜城の主君の許へ、使いを命じられた。長浜の絹、琵琶湖の鮮魚など、心をこめた土産の数々を、荷駄組の武士に運ばせ、彼女は、華麗な奥方用の塗ぬり駕籠かごに、多くの侍女や侍を従えて岐阜に赴いた。主君に会つて、使いを果してからである。信長はくだけで、

「どうだな秀吉は、相かわらず元気に、毎日をおもしろく暮しているだろうな」
などと、いろいろ家庭の内事まで訊かれたので、寧ね子ねも女めごころについ、

「何事も良人のなさることには、不服を申しませぬが、どうか余り夜の局つぼへしげしげお通かよい遊ばすことはないように、どうぞお上から仰おほつしやつて戴たかきとう存じまする」

と、面おもてには笑つて頼んだ。

信長も、苦笑しながら、

「よしよし。わしからもよく云つてやる。そのほうにかけては、くせの良くない男だから」

と、慰め返した。

すると、日を措いてから、主君の信長から、寧子へあてて書面がとどいた。いつぞやの土産物の数々の、実に見事であったことなど、欣びを認めた後で、

——仰せのごとく、こんど、この地へ、はじめ越し、けんぎんに入、祝着に候：
そこもと 其許の眉目ぶり容まで、いつぞや見まいらせ候折ふしよりは、十のもの二十ほども見上げもうし候

藤吉郎、れんれんと、ふそくの旨、申すの由、言語どうだん、曲事に候が、何方を相たずね候とも、また二たびは、求めがたき夫にもあれば、其許にも、おもおもしく、りん気などに立ち入りては然るべからず、ただし、おんなの役に候あいだ、ふんべつにて、程ようあるは、あしかるまじ……

などと婉曲にはあるが、寧子の悩みに、誠めを与えていた。寧子は、それを見て、後では、

「なぜ、御主君などへ」と、深く悔いた。

そして今さらのように、女ごころの不覚を知った。意志のつよいつもりでいる自分にも、脆い一面を気づいて、自分を恐ろしいと思った。

その心をもつてその日から、彼女は改めて、良人に侍かしずいた。良人の愛は、以前より勝つても、變つてはいなかつた。愛を疑う時、愛はすぐ黒い雲に変わるもの——と、寧子はひそかに良人に詫びた。

それから間もなく。

秀吉は軍をひいて、中国へ出征した。

長い留守がつづいた。何年も、何年も。

そのうちに——天正十年五月、上洛中の主君信長が、叛臣はんしん光秀みつひでのために、本能寺で討たれた。

變が伝わると共に、秀吉の留守城長浜は、明智光秀に加担の阿部淡路守あべあわじのかみの軍勢に攻め襲よせられた。

寧子は静かに、留守の一族や侍たちへ殿軍しんがりのさしずをした上、侍女たちの手もかりず、自分の背に母を負つて、慥乎しっかと結ゆいつけ、片手に薙刀なぎなたを携えて、東浅井郡ひがしあさいごおりの山奥、大吉寺だいきちじへのぼつた。

母を、寺内にかくして、夜も昼も、彼女は門前に立つて固めた。侍女たちを入れても、五十人に足りない手勢であつたから、もし敵がこれへ来たら、斬死きりじにの覚悟であつた。——

—だがそうしてもなお、留守の良人に詫びきれない心地のものは、母の身に万一のこともあったらということであった。良人の孝心を思うと、逃げきれるだけ逃げのびたいし、武門の妻であることを思うと、

「秀吉の妻として、笑われぬよう」

と、悲壮な斬死へ、気は逸はやつた。

七

わずか十日余りだった。

秀吉は、変を知ると、中国高松城の水攻めを、毛利家との和睦わぼくに中止して、疾風のごとく陣を返し、山崎の一戦に、光秀を葬ほうむり去った。

長浜城は、奪回した。

秀吉は、大吉寺の山へ上って来た。

真つ先に、母のすがたを求めて、才と呼ぶ母を見ると、

「おっ母さん！」

子どもみために縋った。

それから、

「寧子ねね。寧子ねねつ」

と、呼び立て、

「よくいたした。よくいたした。それでこそ秀吉の……」

妻と手を取り合つて、泣いているのである。

寧子ねねは、ものも云い得ない。ただからだ体じゅうのふる顫えるような歡びにつつまれていた。人間

と生れなければ——人妻となつてみなければ——また、こういう難儀をも突きぬけてみなければ——この歡びを生命に味うことは出来なかつたろう。そう落着いた後では思つたことであつた。

ふたりの間の愛も。

二十歳だいの頃、

三十の頃、

また、四十をも越えた今。

——とかえり顧みてくると、愛そのものの動かぬ相にも、自然その深度と意義には、年と共に

変化があつた。お互いに培つて来た努力がようやく、ほんとの夫婦愛の実となつて、今、結ばれているのが分つた。

何かしら、その頃から後の彼女の胸には悠つたりと、大きな安心がすわっていた。

春の海のようにそれは寛い。

秀吉の側室に、うら若い淀君とかいう美女が侍くようになって、閨門を繞る奥仕えの者たちから、いろいろな曲事が聞えて来ても、その寛やかな彼女の胸に、小波も立てることはできなかつた。

時に、怒濤は立つかも知れない。幾歳になつても、女性の血は女性の血であるから。――けれど、彼女のそばに常にいる召使も、時折に伺候する家臣も諸侯も、彼女に会えばいつも花の木陰に憩うような平和をおぼえた。春の海に向うような寛さを覚えた。塵ほども、淀君に対してうごく色を見たためしはなかつた。

すでに、秀吉は、太閤といわれ、その母は、大政所と敬われ、そして寧子は、北の政所と称されていた。

いうまでもなく、大坂城にあつて、天下を統べている秀吉であつた。

その秀吉の不足と、彼女のたつた一つのさびしきは、遂にまだ、二人の仲に子のなかつ

たことである。

八

淀君には、子が生れた。

つるまつぎみ
鶴松君といったが、あかこ嬰児のうちに早世した。

次に、ひろいぎみ拾君を生んだ。後のひでより秀頼である。

北の政所まんどころもあるかなしかのようにな、淀君の勢力は、自然大坂城おおさかに偉おほきなものとなつた。

こんな事もあつた。

佐々成政さつさなりまさが、北国すじの地じぎむらひ侍へたのんで、白山はくさんの黒百合を取りよせて、北の政所へ献上した。

めずらしい高山植物の花だった。黒いばかり濃こむらさき紫の百合である。北の政所は、「ひとりで慰むのも、花に勿体ない心地がする」

と、茶会を思い立って、利休りきゆうの娘で、鴟屋もすやの妻となつていたお吟ぎんを召しよせて、趣好

を相談した。

何かの打合せをすまして、お吟ぎんが西の丸から退がって来ると、淀君付の局つぼねが待っていて、「そつと、淀君さまからのお訊たずねじやが、そなた、何の御用で、西の丸へは何ったか」と、廊下の端はしで訊かれた。

お吟は、ありのままに、

「めずらしい黒百合がお手に入りましたので——」
と、茶会の趣好をはなした。

茶の日には、淀君もよばれていた。人々はみな、珍しがったが、淀君は、黒百合のことを、よく弁わかまえていたので、

「お智識でいらつしやいますこと」

と、人々は感心して聞き入った。

それから数日たつと、こんどは淀君のほうの催しで、「花摘はなつみの会」の招きがあった。殿中の廊下には、たくさんの花桶はなおけが並べてあつて、各が心まかせに、好みの花を摘んで、挿いけたり、家土産づとに戴いて帰った。

ところが、いつぞやの黒百合と同じ花が、他の雑な花と一緒に、一つの花桶に突つこん

であつたので、人々は、

「まあ何として？ ……」

と、眼をみはつた。

その皆の眼は折ふし来合せた北の政所の面をお気の毒で見ると、
に外らしあつていたが、北の政所は、花桶に眼をとめると、

「おお、たくさんにある……」

と、微笑んだだけだったので、その和やかな面をながめた人々は、

「今日の花の、どの花よりも美しい」

と、ひそかに思つた。

九

太閤の母、大政所は、八十歳を一期として、聚楽で亡くなった。

薨去の報らせを、太閤は、名護屋の陣で知つたのである。彼は生涯の大事業としてい
る朝鮮役の出征にかかつていた。

軍事を措いて大坂へ帰った。

——が、臨終には間にあわなかつたのである。もう老齡な子は、母に取りすがって、人前もなく歎いた。

日本を統一し、海外にまで余力を展ばして、大陸経営まで抱負している大氣宇な太閤が、「寧子寧子。もう何を張合いに」

と、泣いたということである。

寧子は、大政所の病中、帯も解かないほどだった。彼女も急に老いていた。

「お察しいたします。けれどあなた様にはまだ、大きな御使命がございましょう。……

寧子は、何をあてに、この先の日を」

高野山に青巖寺を建て、諸国に供養所を興して、亡母の冥福を禱つても、秀吉の心は、なお癒えなかつた。

朝鮮陣の半ば、太閤もまた、六十三を一期に、薨去した。

「……寧子」

わかれには、たった一言、そう云つてにこと、顔を見あわせたのみであった。

北の政所は、大坂城を退いて、京都の高台寺の峰に、一寺を建てて、ひとり清らかに住

んでいた。——いやほど近い阿弥陀ヶ峰の土に眠る太閤を、朝夕に訪れるのを楽しみとして。

淀君の生活は、彼女とは反対に、それから遽な爛熟を迎えた花のように咲けるだけ狂い咲きに咲いて、そして、元和元年の夏の陣に、大坂落城の炎に散った。

子の秀頼も。一族も。

彼女を繞る無数の男女の召使までも、また、太閤の遺したあらゆる物も——愛情までも、その焦土へ投げこんでしまった。

真つ赤な天は、ふた晩も三晩も、京の高台寺の峰からもよく見えたほどだった。

そこも阿弥陀ヶ峰も、颯々と、冷たい松風のみであった。

家康も、そこへは兵を上げなかった。

むしろ敵の家康まで、彼女の才徳と貞操を感じて、寺領を寄進したり、何かと生涯の面倒を見るように、所司代の板倉勝重へいつけたほどであった。

寛永元年の九月、彼女は安らかに世を終った。

六十七歳まで——死ぬるまで、彼女は太閤の愛に抱かれていた。

青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「主婦之友」

1940（昭和15）年3月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：雪森

2014年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本名婦伝

太閤夫人

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>